

宋元版禅籍研究(六)

——羅湖野録・感山雲臥紀談——

椎 名 宏 雄

一

大慧宗杲の法嗣、仲温晁瑩(生没年不明)は、晩年に羅湖(江西省)の附近に居住して『羅湖野録』を撰し、また、豊城感山(同省)の雲臥庵に移って『感山雲臥紀談』を著した。前者には紹興二五年(一一五五)の自序と同三〇年の無著妙摠尼による跋が付され、後者には淳熙五年(一一七八)以後に成る「雲臥庵主書」一編が付せられて、それぞれ右二書のおおよその成立時期を知ることができる。

両書ともに、宋代叢林における紀譚や警語を編集した同傾向の禅書であり、わが義諦の『禅籍志』には、慧洪の『林間鈔』や大慧の『宗門武庫』などとともに、宗門随筆の部に類別されている。『羅湖野録』二巻中には、上巻四五点、下巻四九点の言行が収められ、『雲臥紀談』二巻中には、上巻五二点、下巻四四点の言行と、前掲「雲臥庵主書」とを収め

る。ともに初刻以来、前者はおもに大陸と本邦において、後者はおもに本邦において、それぞれ多くの版行を重ね、末書もすくなからずつくられている。かかる傾向は、両書が禅門の遺行逸事を集め、史伝の欠を補う特長をもつとともに、前者は肩のこらぬ野史の一とみなされて、『説郛』をはじめとする一般叢書中に収録されてきたからであり、後者は禅匠による偈頌詩文の往来や法談宗論が豊富であるところから、とくにわが五山以降の叢林で参究愛好されてきたことを、ものがたるものであろう。

両書とも、すでに久しく宋版の伝本は知られず、五山版をもって現在最古の刊本とする。また、各異版の間に、抄録本をのぞいては、文章語句に増減等がみられず、異版のテキスト研究にとつては、あまりおもしろくない禅書ではあるが、版行が多いので、以下、一応これらを古い順に紹介し、個々のテキストの系統について整理しておきたい。

『羅湖野録』は、妙摠が付した紹興三〇年（一一六〇）の跋により、そのころに宋版①の初刻がなされたに相違ない。その体裁は、嘉元ごろ（一一三〇—三三）の刊行とされる覆宋版であるわが五山版②が最古のおもかげを伝えている。東洋文庫所蔵のそれは、上下二巻の美本である。同文庫には、またこの版の後刷本③も所蔵され、文亀元年（一一五〇—一）に東白軒で点した識語がみられ、東福寺善慧軒の旧蔵印も有する。

大陸で明初に編集された著名な『説郛』中に、本書が抄録されたことは注目される。今本の『重較説郛』（内閣文庫蔵）写第二一の第二三冊中の④は、序と抄文三七点から成る。ただし、序には年記がなく、本文は全九四点中、前半のものを中心とした三七点を抄出し、しかも長文のものは抄文である。なお、明代刊の『唐宋叢書』第三二冊収録本⑤は、この『重較説郛』本と版式・行格ともに一致し、明らかに④を承ける一本である。

南北の明蔵に採録されぬ本書が、最初に入蔵するのは、方冊本の嘉興蔵においてである。この明蔵本（六二—一八）⑥は、万曆二九年（一六〇一）の刊行であるが、本文には前掲②の五山版に比較して、若干の異同がみられる。したがって、⑥は②の原本である宋版を直接に承けるのではなく、その間に

異版を怪たものか、または明蔵編集者の整理をへた一本とみられよう。

そのの間もなく刊行されたとみられる『宝顔堂続秘笈』第一九—二〇冊所収本⑥は、陳繼儒・高承埏の共校とされる四巻本であるが、本文中に不明の割注文があるなど、けっして善本とはいえぬ。おそらくは、良くない底本によったからであろう。宝顔堂とは、陳繼儒（一五五八—一六三九）の齋名である。ところが、その蔵書の続函である『陳眉公家藏秘笈統函』第一六冊所収本⑦は、明らかに⑥を承けながら、右の不明部分などが補訂されている。⑤本などによって校訂したのであろうか。なお、『四庫全書總目』一四五の子部積家類中、浙江鮑士恭家藏本として『羅湖野録』四巻を所録するのは、巻数などからして、右の⑥か⑦のいずれかを指すものである。

さて、わが江戸期には、すくなくとも三本が京都で刊行されている。まず、寛永一五年（一六三八）に風月宗智が刊行した二巻二冊本⑧は、序文がみられない。しかし、本文は五山版を底本としてみるとみられる。この⑧の版木を用いて河南四郎右衛門が後刷した一本⑩と、同じく京都の藤屋三郎兵衛が刊行した一本⑪とをくわえて、これら三本が、いわゆるの流布本にほかならない。ただし、⑩のみは目下のところ、所在が不詳である。

ところで、近代における正統藏本(二乙一五五)⑩は、わずかに五文字についてのみ他本との校異を注記する。この校注と、序跋・刊記等を比較対照の結果、統藏本の底本は、右の流布本や明版ではなく、②の五山版そのものであることが判明する。つまり、⑫はテキストの資料としての価値が高い。なお、大正八年(一九一九)刊の『国訳禅宗叢書』第一輯所収本⑬は、⑨の寛永本を底本とするものである。

つぎに、刊時不詳の上海有正書局刊行の上中下三巻本⑭がある。本書は、一九八〇年一二月に筆者が杭州市の古旧書店で購めた小冊であるが、刊時不詳ながら、民国初年刊行とみられる石版本である。跋を欠き、三巻という独自の編成が珍しいが、本文内容からみて、⑤の明藏本に近い。おそらく、⑤を承けるのであろう。また、『禅籍目録』には金陵刻経処刊行の一冊本⑮が所録されているが、目下その所在が知られず、右の⑭のとの関係なども不詳である。

民国二四年(一九三五)に、かの『叢書集成』初編史地類、第三三五四冊に所収される四巻本⑯は、前掲の⑥宝顔堂本を底本とすることを明記している。しかし、⑥の本文中の無刻部分が全文印刻されるなど、他本によって補訂していることが知られる。さらに、民国五七年(一九六八)刊の中華大蔵経第二輯第九六冊所収本⑰は、いままでもなく⑥の明藏本の影印である。

以上のほかに、江戸初期の筆写本として、②林羅山(一五八三~一六五七)の手稿本(内閣文庫)一冊、③一糸文守(一六〇八~一六四六)の自筆本(松ヶ岡文庫)二冊、④濃陽の祖恩の手沢本(筆者)二冊、などがある。①は未見であるが、②と③はともに五山版にもとづく謄写であり、就中、④は傍注が詳細である。これら三本は、近世はじめに、儒家禅門を問わず、本書が流行していた傾向を示すものである。

かくして、『羅湖野録』のテキストの系統としては、五山版系と明藏本系が二つの流れを形成するが、比較的に前者の方が善本系であることを指摘しておきたい。

三

『雲臥紀談』の現存最古刊本は、宋版①を覆刻する鎌倉末期刊とされる②本と、貞和二年(一三四六)の刊記をもつ③本との各五山版である。ともに二巻二冊本であるが、両者の大きな相違点は、刊記の有無のほかに、②が有界で③は無界の版式、②が上巻の首部に序と「雲臥庵主書」があるのに対して、③では「雲臥庵主書」が下巻末尾に置かれていること、などである。大東急文庫所蔵の②本は、識語により、かつて安聖禅院・東福寺善慧軒・城北聖寿寺、の各寺に旧蔵されていた変遷が知られる。一方、③は鈴鹿の竜興寺や穂久邇文庫等の所蔵とされ、いまだ未見であるが、この③を寛永年

間(一六二四~四四)に覆刻した覆五山版⑤(東洋文庫・筆者等)があり、その内容が知られる。

ともあれ、「雲臥庵主書」を巻頭に置く②の体裁が宋版の原型であり、③はこれを改編したものとみられる。この「書」は、晁瑩が同門である徑山の遯庵宗演に寄せた長文の書簡であるが、大半は『大慧年譜』の記事の誤りを訂正する文から成る。文中、『雲臥紀談』に關説し、晁瑩六八歳の時の文なることが知られる。すなわち、この「書」はすでに成っていた『雲臥紀談』に付して刊行されたのである。

さて、右の二種の五山版のほかに、『禪籍目録』はもと東大所蔵で失われている嘉慶二年(一三八八)刊行の五山版④を所録する。他に現存するかいなかも不明な一本である。

江戸期には、前掲の⑤のほかに、京都の小川源兵衛から⑥の貞和二年版の後刷本⑥を刊行している。さらに、本宗元珍が注釈をなした『雲臥紀談輯略』四巻が、享保二年(一七一七)に京都の文台屋宇平より刊行されている。この輯略本⑦は、巻頭に全巻内容の目録を備え、柳枝軒や松月堂でも再三にわたって版を重ねるなど、原文だけの⑤や⑥の諸版よりも、はるかに広く配布したらしい。

下って近代の活字本としては、明治四三年(一九一〇)刊行の『続藏(二一一)』所収本⑧と、大正八年(一九一九)刊行の『国訳禅宗叢書』第一輯所収本⑨とがある。⑧は⑤の寛

永本を底本とすると思われるが、⑤にはみられぬ巻首の目録が存在する。したがって、この目録のみは⑦の輯略本から採録したものと推定される。続藏の編者は、便宜をはかるために、かえって原本の体裁を失わさせている好例である。一方、⑨の禅宗叢書本には底本を⑦とすることが明記され、⑦の輯略本による影響のほどを示すものである。

『輯略』とともに、本書の末疏として注意すべきものに、江戸中期の碩学、無著道忠(一六五三~一七四四)の撰する『雲臥紀談対校』一冊がある。小冊の草稿本ながら、この書には『雲臥紀談』と『羅湖野録』中の共通する本文記事を対校する部分が、数箇所にわたってみられる点で興味がある。

以上のように、『雲臥記談』のテキストとしては、③の貞和二年刊五山版を中心とした、比較的単純な系統を形成している。明版系統の刊本がなく、覆五山版や後刷本が江戸期に刊行された場合の、禅籍におけるテキストの系統に関する傾向を示すものといえよう。

(系統図と注略)

(駒沢大学講師)